

なぜ今「水のいのち」？

私が学生のころ、《水のいのち》を歌えなければ合唱人じゃないと言われるほど、日本中の合唱団によって演奏されていました。昭和100年のいま、当時は気づかなかった新たな視点を得て、この曲を多くのワンステージメンバーのご参集と共に演奏できることを心から嬉しく思います。

熱心なキリスト者であった高田三郎先生。氏は旧約聖書「創世記」の記述から、《水のいのち》の作曲の着想を得たのではないかと——そんな思いが私の中でふつふつと湧いてきました。冒頭に「初めに神が天と地を創造された」とあります。「地」と聞くと私たちは陸地を思い浮かべますが、「水に覆われた混沌とした地」を神は創造されたのです。天地創造を「混沌から秩序への移行」ととらえるならば、神はまず「天」と「水で覆われた地」に光をもたらし、大空を設け、水を分け、陸地を現し、さらに生命を宿らせていかれた——まさに、カオスをコスモス（秩序ある世界）へと変えていく流れなのです。この解釈は、人間の霊的成長や人生にも当てはめることができるでしょう。混沌とした状況や試練の中でも、神がそこに秩序を与え、新しい形を生み出してくださる——そう考えると、天地創造は単なる過去の物語ではなく、今を生きる私たちにとっても示唆深いものとなります。

——各楽章と天地創造の関係——

第1曲「雨」・・・天地創造の過程で「水」は秩序を得て、大空の上と下に分かります。雨はその循環の一部であり、神がもたらす恵みの象徴です。混沌から秩序を生み出す主の愛の計画の始まりです。

第2曲「水たまり」・・・水たまりという小さな世界の中に、宇宙が映り込み、生命の兆しを覚えます。「小さな水たまり」に映り込む自己と向き合うような感覚を生み出しています。

第3曲「川」・・・「エデンの園を潤す川」と「ノアの大洪水」のイメージが重なります。川もまた生命の源であり、また神が定めた秩序に従い、時にしずかに、時に神の怒りを伴う流れとなります。

第4曲「海」・・・海はすべての水が行きつく場所であり、包容力を持つ存在として描かれます。創世記1:10では、神が「水の集まる所を海と呼ばれた」とあり、ここに初めて海が明確に創造されます。

第5曲「海よ」・・・水が単なる自然の一部ではなく、命を育む根源的な存在として歌われます。創世記の「すべてを神が良しとされた」という創造の完成を象徴し、組曲の締めくくりとなっています。

——バプテスマ（洗礼）との関連——

「混沌から秩序への変化」としての水の象徴性に加えて、「海」をテーマにした第4曲と第5曲では「水に沈むこと＝死」「水から上がること＝復活」、すなわち神の赦しと新しい命を授かる「バプテスマ（洗礼）」の象徴と読み解くことができます。創造主の天地創造の過程を含みつつ、バプテスマを通して新しい命が与えられ、蘇るプロセスを描いた作品としても解釈できるとの気づきを得ました。

——感謝を込めて——

高田三郎先生の奥様、留奈子先生はご生前、私に「もし主人が生きていたら、富岡さんとの出会いをどれだけ喜んだことでしょう」と。私の心に深く刻まれたうれしいお言葉です。この曲の男声合唱版の初演指揮者・日下部吉彦先生は、ご生前は滋賀男声の演奏会に必ずお出ましくださり、私たちの活動を見守って下さいました。このお二人のお支えと励ましに感謝を込めて、今回の演奏に臨みます。

コーラス・ファンタジー『ライオン・キング』 - 宮本妥子/後藤ゆり子さんをお迎えして -



今回も、滋賀男声合唱団は日本屈指のオペラハウス・びわ湖ホールにて演奏会を開催する恵みを得ました。滋賀男声合唱団は、このホールが備える世界トップレベルの舞台装置を享受するために、これまで数多くのミュージカル・ファンタジーを創作してまいりました。そして今回は1997年にブロードウェイで初演されたミュージカル『ライオン・キング』です。

このミュージカルの音楽の特徴は、エルトン・ジョンとティム・ライスによる洗練された名曲に加えて、南アフリカのアーティスト、レボ・Mが作曲した「Nants' Ingonyama」などのズールー語のアフリカン伝統音楽との融合にあるといえます。壮大なアフリカの灼熱の大地と自然、そこに生きる命の熱いエネルギーを表すために、親交のある関西を代表する打楽器・マリンバ奏者の宮本妥子さんと後藤ゆり子さんにご共演いただくことになりました。

私たちはこの壮大なミュージカルに、ズールー語に悩まされながらも果敢に挑みます。滋賀男声合唱団版コーラス・ファンタジー「ライオン・キング」をお楽しみください。